

波の音だけの舞台上で手話表現

内海美樹 「地球4周分の歌」 公募出演者、調理師、美作市在住

私は手話と出会って19年。仕事で手話と関われない時期もありましたが、何故か止めてしまおうとは思いませんでした。今回の移動演劇で、私は『忘れられた日本人』を手話で表現しました。海を背景に、ただ波の音だけの舞台上で、手話表現はどんな風に映ったのか…他の出演者のパフォーマンスを、犬島の風土と石を運ぶ人によって、演出家の言う『記憶と出会いの演劇』が、どんな舞台になったのか…私も観客になって体感してみたかったですね。



移動演劇・宮本常一への旅

「地球4周分の歌」

演出 村川拓也

犬島での「移動演劇」に参加した。維新派の公演で来たことはあるが、昼間にこれだけ長くこの島にいたのは初めてである。

船に乗っている時間も含めた、島全体を体験する企画はたいへん興味深く、さまざまな工夫を楽しんだ。島の魅力そのものを活かすためには、やり過ぎてはいけない面もある。そこで、ある種の「緩さ」を潔く選択した所が、慧眼であると思った。「創作」に混じって、島に住む方々が見せてくださったさまざまな表情、「興味がおありなら」と島の歴史を語り出された瞬間は、演劇表現が「虚構の提出」を目的とするのではなく、本質的に「ライブの体験」そのものであることを、再確認させてくれた。

半世紀にわたり牛窓の海と慣れ親しんできた私ではあるが、前島以外の島とはあまり縁がなく、維新派の犬島登場には心底驚かされた。そして今回は、この島が、過去と未来、全体と周縁の「対話」の場として、この十年ほどの時間に育まれてきたことを受けとめられた、充実した一日だった。

想像つかなかった「移動演劇」

豊田一男

あけぼの丸船長、岡山市東区宝伝在住

春に予定していた「ささやき」の時もそうだけど、宝伝港から演劇が始まる「移動演劇」というものが想像つかなかった。実際にやってみると、定期便との兼ね合いがあるから、演劇に合わせてあけぼの丸を時間調整するのが難しかった。あと、「乗れます？」と聞かれて、チャーター船だからと断ると「維新派のときには乗れたのに」とか言われて、困ったりした。

犬島に定住してくれる人がいたらいいなと思いながら仕事をしている。ものづくりをしている人なんかいいと思うのだけれど…



過去と未来、全体と周縁の「対話」の場

坂手洋二 劇作家・演出家、燐光群主宰、東京都在住



Photo all by : Daisuke Aochi